

キリスト道講演会

小池辰雄先生の使徒的信仰——小池辰雄生誕百年記念講筵

2004年2月8日（東京 新宿）

奥田 昌道

1950年の大転換 オール・オア・ナッシング 前半生46年、後半生46年 「私の信仰史と現在——1960年を迎えて」 無的実存・聖意体現 十字架と聖霊 細き路、狭き門 根源現実 原始福音と使徒的信仰 幸いなるかな、霊貧しき者 キリストの幕屋 「幕屋」から「召団」へ 「キリストの原始福音」 無条件絶対なもの 南無キリスト 絶対的な愛 碎かれてくださったキリスト キリストの霊気 「エン・クリスト」ゼロ＝無限大（祈禱会）キリストに圧倒されている 戦いの人生 ナッシングに徹する 祈りは「主さま！」 祈り

●1950年の大転換

今日は小池辰雄先生の生誕百年ということですので、一体、先生はどのような歩みが続けてこられたのだろうか、それを一緒に味わおうと思います。私は先生にお会いしたのは1959年です。先生が劇的な転換をとげられたのは1950年ですから、それから既に9年たっている。あの劇的大転換から10年近くたとうとしていますから、ほぼそういうものが静まりつつある頃でした。何が静まるかという点、先生の場合には、自分の信仰はすぐ燃えられた。そのことの故に、先生の回りに大変な嵐が起こった。ご家庭という意味ではありません。信仰の世界です。即ち、先生は無教会の出身です。内村鑑三に初めて触れ、高校生のときにご病気で自宅へ帰られたおりに、内村先生の集会へ出かけて行った。そこであの

「幸いなるかな、霊の貧しき者」

という、聖書講義を聞かれた。それがきっかけです。

お兄さまの死を通して、藤井武先生に導かれ、そして、1930年に内村・藤井両先生が召天されたのちは、塚本虎二先生のもとにしばらく、助手のような立場で助け手として働いておられた。それから、数年の後、1940年から新しいスタートをきられた。それから10年間、いわゆる無教会陣営のエースとして非常に注目されておられる。1950年に大転換が起こって、無教会から追放される恰好になってしまった。

この追放されてから後の10年間は、その足取りというのは私は自分の目では見ておりませんが、先生の『曠野の愛』という雑誌を通して見ますと、実に壮絶なるものです。これは著作集という形でまとまっていますと——『随想集』（小池辰雄著作集第六巻1982年刊）とかいろいろ断片的に編集されています——この生々しさは薄れているかもしれませんが、こういう『曠野の愛』誌を見ますと、その扉の頁や、もちろん本文、そして後ろの方にいわば「武蔵野だより」とか、あとがきのものがあるわけです。そこに先生のそういった信仰の戦いのことが書かれている。

無教会の中堅学者、代表的な学者から論難されて、

「小池はおかしい。無というようなことを言いだした。仏教とごちゃまぜにしている。

けしからん。聖霊、聖霊と言って、十字架がない。聖霊派だ」

とか、いろんな論難をされて、それに対する或る意味での弁明、また執成しとりなをされた。そして、

「もう小池を煩わさないでほしい。私はキリストの直弟子になろうとしている。あの使徒たちと同次元、同質の世界に生きようとしている。どうぞ、足を引っ張らないでほしい。煩わさないでほしい。福音の事態というものは、分析や研究でつかめるものではない」

と。先生自身がその研究の角度でずっと進んでこられて、しかも、行き詰まられた。何かちがう、何か足りないということを感じられて、それは祈りだということに気づかれた。先生は、祈りは深かったと思うんです。あの「無教会神学論」とか、その前の「終末の実存者」とか、そういう論文を読みましても、実にもう火花している。爆発寸前なんです。

それが1950年に阿蘇山で霊的な爆発が起こった。手島郁郎さんと一緒に集まりで。その手島郁郎さんは、『旧約知識』に書かれた小池先生の詩篇講義にすごく感動して、「先生に一度来てほしい」と言って、何度も何度も手紙をよこされた。特に、1950年11月3日から5日の阿蘇の大聖会の直前、10月15日頃の手島先生からのお手紙がある。

「祈りの中で示された。小池先生に一大印綬^{いんじゅ}が授けられる」

と。それは聖霊のバプテスマのことなんです。

「先生はキリストに遣わされた本当に神のお使いです」

という、直筆の手紙が小池先生のところへ来ている。それを、小池先生の亡くなられる直前に、手島先生のお弟子さんたちが小池先生のところへ来たときに、

「こういう手紙が手島君から来ているんだ」

と、お見せになったら、弟子たちはびっくりしたという。その百通ほどの手紙を持って帰って、全部コピーしてもどしてきたとか、そんなお話があります。向こうの方では、何か手島先生が小池先生を導いたかのごとくに錯覚していた人があるらしいけれども。年齢からいっても小池先生の方が上です。手島さんが小池先生を、「小池先生、小池先生」と言って、自分は先生に学ぶ者だという姿勢をずつとくずしておられなかったということが後からわかって、お弟子さんたちはびっくりしたということです。

そのように1950年に始まりまして、数年は一緒にやっておられたけれども、だんだん違うということに気づかれて、はつきりと一線を画されることになる。これは先生にとっても辛いことだったと思います。というのは、手島さんは、本当に無教会陣営で初めて聖霊のバプテスマを体験した第一号だったんです。

そして、「小池先生、来てほしい。来てほしい」と言って呼ばれて、20人くらいの集会でしようかね、阿蘇の麓でやっておられて、そこで最終日に霊的な大爆発が起こって、先生自身が聖霊のバプテスマを受けた。見事だったそうですよ。その手島さんがあとから、

「聖霊のバプテスマを受けられましたね」

と。先生は

「おお、これが聖霊のバプテスマか」

と。そういうふうなことをしばしば告白しておられますでしょ。

それで、「手島、小池は同じ穴のむじなだ」ということで——ある事件も起こりましたし——非常に無教会陣営からは、「危険人物だ、異端だ、本道からはずれた者」という、そういう目で見られる。しかし、小池先生は手島さんをかばっておられました。

「^{たまもの}賜物はそれぞれだ。自分と手島さんはちがう」

と。それははつきりしておられた。しかし、手島さんはだめだとか、全否定は絶対にしない。それぞれが神の器であると。そういうことを言っておられる。

●オール・オア・ナッシング

私は、ずいぶん、小池先生というお方は手島先生をかばうがゆえに損な役回りをされたなど、客観的に見ている。先生は非常に情に厚い方ですから、ある面で情に流されているところがあります。自分たちの集会でははつきり仰つても、いざ向こうの陣営に行かれたら、ぼかされる。向こうを讃えられるわけです。それは向こうはうれしいですね。先生は「はつきりとそこを言つた」と仰るけれども、私から見たら、必ずしもという感じがする。

それは十字架の問題なんです。

「十字架があつての聖霊だよ。十字架ぬきの聖霊というのは危ないよ」

と。「聖霊、聖霊」と言つて、祈れば降くだつてくるものではない。「ワッショイ、ワッショイ」と祈つて降つてくる霊は他の霊かもしれない。聖霊は、本当に十字架の前に平伏ひれふし、投げ出し、砕かれているところに降つてくる。しかも、人間の砕けではない。人間の悔改くいあらためとか人間の砕けというのは大したことではない。それは自分の思い込みかもしれない。砕けきれない人間、自分でどうにもならない「業ごう」というやつを——西洋では「罪」と言います。東洋では業ごうと言つた方がいいと思います。「業が深い」という。自我とか、業とか——これを根底からキリストが贖くくきつた。それを小池先生は、「引き受けた」と仰る。

「十字架であなた方の問題は全部引き受けられてしまった。完全に引き受けられ、完全にあそこで解決済みだ。何も付け加えることがない。そっくりそのまま、出来上がったものを、「はいっ」と言つて受け取るだけだ」

と。こんな単純な明白な簡単なことではないんです。もちろん、「何かをしろ」と言われたら、みな一生懸命にやりますよ。でも、「何もしなくていい」と仰る。

「何もしなくていい」

「本当ですか」

「本当だよ」

「そんなバカな。騙だまされているんじゃないの」
と。こうなるんです。

私は、昨日来た学生にも言つたんですよ。法律の世界は「ギブ・アンド・テイク」だ。等価交換、有償契約と言う。百円の品物は百円を出して買う。すべて等価なもの交換しあう。キリストの下さるものは、これは等価交換をしようと思つたら、持つていくものはない。こちらから何を持つていったつて、それは等価にはならない。

「ケタ違いなものをただでやる」

と仰る。「等価なものに何を賭けるの?」、「あなた自身を賭けるんだよ」と、私は言つた。自分自身を賭ける。小池先生はよく博打ばくちうちの話がされた。江戸っ子の博打うちというのは、一晩で全財産を賭けてしまう。それでミスしたら、全財産がスカラカンになってしまう。「宵越よこしの金もたねえ」とか言つてね。そういう博打うちの気合、これが福音を受けている気合だというようなことをよく仰つた。

「オール・オア・ナッシング」なんです。全部を献げる。この「全部を」ということが、人

間はできない。99%まではいける。1%は残しておきたいんです、人間というのは。いや、残していないつもりでも、残っているんです。何かどこか引つ掛かっている。キリストは「金を出せ」とは仰らない。「お前自身を出せ」と仰る。だから、乗るか反るかです。私は躍り込んだ。私は失うものがなかったから。もうどうにもならない、自分の行き詰まり、どん詰まりでした。何とかしてほしいというどん底ですから、そうすると、そのありがたい救いの御手^みに自分自身を委ねる。そして、委ねたら、まっすぐに行く。それだけのことです。けれども、

「いやあ、騙されているんじゃないかなろうか」

と思う人は、そこが踏み込められない。残る。この分水嶺です。

どっちも何も失っていないんですよ。私は自分を投げかけたといっても、自分はちゃんと残っているわけだし、財産を棄てているわけでもないし、何も棄ててやしない。自分自身という一番根底的な内面的なところで、私はキリストにおすがりする。キリストが

「お前は大丈夫だ」

と言われたら、「はい」と答える。

「お前は全く贖われてあるぞ」

「はい」

と。すべて「はい」と言う。それはバカだから。

「私はバカだからできるんだ。賢い人^{かしこ}はできないんだよ」

と、これは小池先生のせりふです。

「皆さんは賢すぎるんだよ」

と、よく言っておられた。本当にそうなんです。その先生がその一番単純なところに、だんだん、入っていけるんですね、先生の歩みを跡づけていきますと。

●前半生46年、後半生46年

さつき申しましたように、私が小池先生に出会ったのは1959年です。1950年の大転換、それから9年間のことは知らないわけですけれども。1950年というと、先生は46歳です。先生は46年間、自分は無意味に過ごしたとまで仰った。とんでもない。無意味なことは絶対にない。無意味なことは一つもない。先生にとっては全部必然なんです。お生れからいろんな、お兄さんを亡くされ、お母さまは失明され、そのあとのいろんな歩みは全部、これは神さまの側からのご計画だと私は思っている。小池辰雄という一人の神さまからの使いを育てんがためのトレーニングの時期が46年あって、そして、1950年に大転換をして、それからあと46年生きられた。不思議ですね。46年の前半生と後半生の46年、そして92年の生涯を閉じて、天に昇っていかれた。わずか一週間ほどのお慰めでした。

私たちは——1950年を境にして、前半生の46年と後半生の46年——主としてその後半生に焦点を当てたいわけです。先生の生い立ちから以降のことは、先生の『霊界の星々』という詩集があります。そこに詳しくご自分の生涯を自叙伝の詩の形で表現しておられますので、そこにゆずります。それからまた、『曠野の愛』誌とか、『エン・クリスト』誌とかで、節目節目で自分をふりかえって、生涯を辿っておられます。

「恩人は二人ある。第一の恩人は小池政美^{まさみ}。第二の恩人は母光子^{みつこ}」

という。政美兄さんとお母さまで。88歳までお母さんは生きられて、50歳からあと失明の生

活を38年間された。失明なさったのは、お兄さまが27歳、満でいうと26歳で仆れられた時、その遺骨を抱いて日本に帰る黄海の船旅の中で目を患われて、手遅れになって失明されたという。一度だけ何か、「死にたい」というようなことを仰ったそうですけど、それ以降は一言も自分の目が見えないことをこぼされたことがなかったという。そして、晩年は小池先生を通して信仰の世界に導かれた。先生はお母さまを慰めるために、ご自分の自宅で集会をされた。これが1940年です。政美お兄さまの召天の記念日(9月22日)がちょうど日曜日でした。そこで、集会を開かれたという、そういう歩みです。

●「私の信仰史と現在——1960年を迎えて」

今日お配りしましたプリント、これは『曠野の愛』誌の32号に「私の信仰史と現在——1960年を迎えて」という文章があります。これは「終末的帰一」という論説が掲載されている号ですが、ここに非常に手短に先生の信仰の歴史、生い立ちが書かれています。

「1960年を迎えるにあたり私はここに私の信仰史と現在を端的に告白し且つ宣言する。」

第一期(大手町時代)。1922年の晩秋、内村鑑三先生の著書を亡兄政美(1921年秋、北京にて召天)の書架から「とりて読み」始めたのが私の入信の端緒であった。「とりて読み」というのはアウグスティヌスの言葉です。

旧制水戸高等学校生であった私は、週末上京の折には、丸の内大手町なる私立大日本衛生会講堂の大集会で、内村先生の迫力ある聖書講義を聴くのが何よりの楽しみであった。

第二期(新町時代)。つづく東大ドイツ文学科学生時代と卒業後一年半は、駒沢新町なる藤井武先生の自宅での十数名の寺子屋式集会で親しく聖書を学んだ。先生の召天までのこの五年間は私の信仰に決定的な要素が植えつけられた特別な恩寵の期であった。

第三期(丸の内時代)。藤井先生去って三年間、私はひとりで日曜をまもったが、その間、塚本・矢内原両先生編集の『藤井武全集』のお手伝いをし、特に藤井先生の最終講義たる「黙示録講義」を恩師に対する敬慕と祈りをもってまとめたことは忘れがたい思い出である。その後、丸の内海上ビルにおける塚本虎二先生の聖書講演会に数年列席し、或は司会、或はヘブライ語のクラス担当を承り、塚本・植木編集の『旧約知識』誌同人に加わり、「詩篇」や「ヘブライ語文法」などの執筆をした。塚本先生の弾力性ある信仰とドイツ系学問の織りなす独特の味を学んだことも私のその後の成長に大切な恩恵であった。

第四期(武蔵野独立伝道第一期)。1940年秋、亡兄政美召天記念日(9月22日)を期して、私は恩師藤井武先生の場合にならって、武蔵野の自宅で独立の聖書集会を開いた。聖書を大体啓示史的に跡づけつつ研究し、ほぼ10年間で大半を学んだ。

この10年で大転換が来るわけです。

神学的な思索も第三期から始めていたが、『別の路』、『終末的実存者』、『無教会神学論』(内村鑑三先生二十周年記念論集の一環)のいわば三部曲となつてあらわれた。

この『別の路』『終末的実存者』『無教会神学論』はすべて『無の神学』(小池辰雄著作集第三巻)

に収録されています。これと非常に格闘して、新宿集会の皆さんと昨年読みました。あれはきつかったですよ。これが終わりますと、あとはずっと峠を越えたように楽になる。本当に格闘しながら、特に「無教会神学論」は大変でした。

●無の実存・聖意体現

第五期(武蔵野独立伝道第二期)。1951年1月には本誌『曠野の愛』を創刊した。大体その頃から

というのはその前からです。50年の春頃から再々お誘いがあつたようです。大転換が起こったから、51年から『曠野の愛』を出された。今までの生活にサヨナラということ。

熊本の手島郁郎氏との交友が始まった。彼は阿蘇山にこもって祈り、独自の路を開示された人である。私はこれより先き自分の無教會的集會を「幕屋」と名づけた。それはキリストの体としての有機体的、福音的実存共同体たることを表わすにふさわしいことを示されたからである。手島氏もこれに应じて彼の集會を自ら「神の幕屋」と名づけた。手島氏とはしばらく共同の伝道も折にふれてなし、彼から私もほかでは得難いものを感じ、私なりに消化した。しかし数年前から事実上彼との共同はやめた。彼の伝道がいよいよ彼独自の「カリスマ伝道」的であることは、その主筆『生命の光』誌においてあきらかに証言されている通りである。一方私が私らしくキリストの恩寵による「無の実存」を基調として展開していることも本誌に明かである。

第六期(武蔵野独立伝道第三期)。今や私は1960年、『曠野の愛』誌第十年を迎えるに際して、手島氏の「神の幕屋」と小池の「キリストの幕屋」とは、同じ「幕屋」の名称を用いてはいても、事実上関わりなきものであることを世に明言しておく。(『基督教年鑑』(1960年度)195頁の「神の幕屋グループ」中に私の集會が加えられてゐるのは事実には合わない)。これはキリスト教界の秩序と平和のために、また主自らが織り成し給う大調和、大共同のために正しい事と示されたからである。私は私の使命に即した聖書解説と集會の在り方とをもつて伝道にたづさわっている。私はもとより日本キリスト教界のいとも小さき者である。しかしこの芥種からしだね一粒の存在の自由と独立をいよいよ明らかに自覚し、且つ宣言する者である。

十字架のイエスの「門は狭く」、復活のキリストの「路は細い」。その昔、藤井先生が「僕の路はいよいよ細くなつてきたが、君たちついて来れるかね」とダンテの『神曲』天国篇第二曲の一句に似たようなことを言われたのを思い出す。今を去る30年、1930年に日本は福音と真理のために戦つた二人の世界的人物を相繼いで失つた。すなわち内村と藤井であつた。今年はこの両雄の30周年である。私の独立伝道20周年にもあたり、私個人としては意義が深い。私は恩師の跡を更につき進み路なき路をわけて往く。私もイザヤの如く「これは路なり、これを歩むべし」との主の聖言がうしろべにささやき給うのを聞くからである(イザヤ30・21)。主キリストは現に私の「道」そのもの、真理そのもの、生命そのものである(ヨハネ14・6)。主の聖霊に在つて前進するところ、無門に天門が開かれ、細き路が大道であり、絶路に天路が開かれてゆく。このようなキリストの恩寵による無の実存、聖意体現を念じつつ、福音を身証すべく私は生涯を貫かんと願う者である。(1960年 元日)

これは烈々たる文章です。ここに、私がさきほど不幸なことにと申しましたように、手島先生の群との或る訣別というか、一線を画するということを宣言しておられる。これは先生にとつても非常に辛いことだったと思いますけれども、はつきりとここで公言されていますから、これを正しく受けとつていただきたいと思います。

どこが違うのかという問題です。それはここに、「手島氏の伝道がいよいよカリスマ的伝道」というふうに表示されています。自分はそうではないと。私は手島先生という方を直接には存じあげないので、とやかく言うことはできませんが、私の耳に入った、先生から聞いたりと、著作を通してとか、そういうことで推測するところ、やはり手島先生の方は聖霊の体験が非常に強烈であつたが故でしょうか、そしてまた、非常に霊的賜物が豊かであつたが故でしょうか、何か非常に聖霊による神癒であるとか、聖霊による何かという、それが表に出てきている。そして、それが伴わなければ本ものではないと言う。土台は何かということは仰らないわけです。

「十字架は嫌いだよ。あんな酷^{むご}たらしい十字架は嫌いだ。代罰というのは嫌いだよ」ということを洩らしておられたように伺っています。

手島先生が天に召される直前に、小池先生が手島先生のお見舞いに行かれた12月、もう面会謝絶の状況だったようですけれども、それでも、

「小池さん、私の十字架の受けとり方は、私の信仰は間違っていたんじゃないでしょうか？」

と、先生に聞かれた。これはちゃんと先生の著作集の中に出ています。先生は、

「いやいや、そんなことはないですよ。いや、大丈夫ですよ。手島さん、大丈夫ですよ。」

もうあと余命いくばくもないという方の前に長い話を先生はするに忍びなかったんでしょう。

「自分が去つたら、正月に大聖会がある。それを私の代わりにやつてほしい」

と言って頼まれた。1973年のクリスマスの頃に天界に召されて、1974年正月の大聖会を小池先生がなさった。そういういきさつです。その時も、小池先生ははつきり仰らなかった。

●十字架と聖霊

十字架において自分というものはすつ飛んでいる。自分というのは全面否定されている。完全否定されている。そこに聖霊が臨んでくる。自分というものがこれっぽちでもあれば、聖霊という慎み深い霊は来たり給わない。キリストご自身がヨルダン川で洗礼のヨハネからバプテスマを受けられた時にイエスさまは自分を本当に神さまの前に投げ出しておられる。ヨハネが、

「あなたからこそ私はバプテスマを受けるべきなのに、どうして、私ごときものからあなたは洗礼を受けようとされるんですか」

と、いったん拒む。キリストは、

「いや、今は受けさせてほしい」

と言って、黙つて水に身を沈められた。ヨルダン川は世界の中で一番低いところを流れている川だそうです。そこにあの神の子、羔羊^{こひつじ}イエス・キリストが身を沈められた。小池先生はそれを何と言われたか。

「我々が悔い改めたつて、本当の悔い改めはできない。いくら、悔い改めろと言つたつて、本当の悔い改めはできっこない。我々ができない悔い改めを、キリストが代わりにあそこでやつてくださった。」

と。水から上がられて、祈っておられたら、天が開いて聖霊が鳩の如く降ってきた。

「これはわが愛する者、わが意にかなう者なり」

という御声が天から来た。聖霊のバプテスマをそこで受けられた。ヨハネがそれを証している、
「この方こそが世の罪を除く神の羔羊だ」

と。そのお方が、なんとその後、御霊に導かれて、荒野の試みに遭っておられる。「聖霊が降った。さあ、伝道に行こう」というんじゃない。まず、荒野の試みで、四十日四十夜ただ独り、壮絶なサタンとの戦いをやっておられます。そして、四十日たったときに、サタンが、

「お前は神の子だろう。この石をパンに変えてみる」

と、誘いかけてくる。

「人が生きるのは、パンだけではない。神の口から出る一つ一つの聖言、これが生命だ」

と言って、拒絶されます。それから今度は、塔の上へ連れて行って、

「宮の頂きから飛び下りてみる。『天使が来て支える』と詩篇に書いてある」

と誘う。

「神を試みてはならない」

と応じる。それから、山の頂きへ連れて行って、世界の栄華を見せる。

「私に跪いてごらん。全部差し上げるから」

「神にのみ従え」

と言って、断乎拒絶されます。

即ち、先生がここで「細き路」「狭き門」と言っておられるのは、そういう路なんです。つまり、神さまだけがすべてだ。その前に自分を全部献げきつていという、この姿を先生は「無者」と言われた。キリストのような善そのものなるお方が、「自分は善だ」と思っておられない。自分は本当に神さまの前に自分を投げ出し、献げて、空っぽで、ただ

「御意を成さしめ給え」

と、自分を投げ出して祈っておられる、その姿。これが義の姿だ。そこに聖霊が臨んできた。そして、臨んきた聖霊を決して私なさらない。

「私の業ではない。私の言ではない。私の中で父が聖業をなさっている。だから、私を見た者は父を見たのだ」

と。キリスト自身が空っぽですから、無限大という神さまが宿っている。天国が宿っている。

「神の国が私の中にある」

と。そして、あの自由自在な聖業が展開していった。病める者はことごとく癒される。死人も甦る。あれはことごとく、神さまのキリストの中の聖業であって、キリストご自身の、私の業ではない。栄光は神にという。そこなんです。同じ現象が伴っても、自分はぶつつぶれて投げ出しで、空っぽで、

「聖霊の聖業が展開しているだけで、私ではありません」

と言って、自分を徹底的に否定している姿が本ものなんです。そうでなくて、いかにも自分が

神の器としてやっていて、

「私が来たからには、もうお前たちは大丈夫だから、安心したまえ」

というような、もしそれが自分の賜物^{たまもの}、自分のカリスマをわがものとして何ものかと思えば、それは危ないわけです。私は人の心の中はわかりませんから、何とも申しませんが、もしも、そこに本当の十字架の平伏し、自分を投げ出している、それがなくて、何か人間誰々がいかにも賜物をいただいて、はなばなしの伝道をやる、「さあ、みんな寄っておいで」というふうな形であつたら、これは危ないわけです。

●細き路、狭き門

確かに、人を引き寄せなければなりませんし、人を救わんがためには手段を選ばないということも必要なかもしれません。けれども、先生が行かれた路はそうではなかったということです。これが「細き路、狭き門」と書いてある。

「無門が天門である。狭き路が大道である」

と。この宣言、これを私たちはいつも肝に銘じている必要があります。先生があれほど、「霊の貧者」「無者」「幸いなるかな霊の貧しき者」と言われた。それも自分で貧しくなれない。

「恵福^{さいわい}なるかな、汝、わが十字架によりて既に霊貧しくされている小池よ。お前の中に聖霊の我が宿りたり。復活の我、宿りたり」

と。そこで、先生は痺^{しび}れてぶつ倒れたという。これは阿蘇ではない。東京に帰られてからです。そういうのがキーノートです。だから、そこへ絶えず立ち返っていく。

「使徒的信仰」といつても、使徒行伝ははなばなしですよ、現象に惑わされてはならない。あの現象の奥にあるもの、それを先生ははつきりつかまれる。私はおそらく、あの使徒たちはペテロもヨハネも自覚していないと思う。あまりにも生々しい現実だから。もうキリストが乗り移っておられますから。復活されたキリストが昇天されて、火となつて降ってきたペンテコステをへた弟子たちの中に、もう聖霊のキリストが乗り移っておられるから、使徒たちは自分たちの中で何が起こっているか、おそらく自覚なしにやっていると思う。これは私の想像ですが、けれども。だから、本当に凄^{すご}いことが使徒行伝に起こっているでしょ。

その現象の奥にあるもの、これを先生は捕まえたわけです。それが十字架だということです。十字架のないところに絶対に聖霊は来ない。この歴史的順序を誤つてはいけません。十字架され、そして復活された。四十日間、弟子たちに時々現れた。

「お前たちは祈つて待つておれ」

と言って、昇天された。それから十日間、弟子たちが祈っていたら、あの火のバプテスマが起こつた。使徒行伝第2章のペンテコステです。あの歴史的順序というのは大事だ。けれども、その現象ではない。すべては啓示の事実だと仰る。イエス・キリスト自身がもう啓示中の啓示だ。イエス・キリスト自身にも躓^{つまづ}いてはいかん。十字架も啓示だ。歴史的にイエス・キリストとして受肉し、あのように歩み、そして弟子たちと一緒に暮らし、十字架で無惨な最期を遂げ、そして復活されて、昇天されて往かれた。あのまさに歴史的なイエス・キリスト。その方自身もまた啓示なんです。それを通して何を我々に語ろうとしておられるのか。

十字架自体も、もう今は影も形もないでしょう。けれども、霊界には燦然^{さんぜん}と立っているわけです。そして今度は、霊界に立っている光輝く十字架が一人びとりの中に、胸の中に立っている。

「仰ぐのではない。皆さんの中に立っている十字架の前に平伏しなさい。仰いでばかりではだめだ。交われ、飛び込め」
と仰る。これが、私は小池先生のメッセージだと思っている。私は、「十字架が私の中に立ちました」と言う。

●根源現実

キリストの方から降り給うた。天から降ったクリスマス。今度は、聖霊となって弟子たちに降ってきた。私たちに対しては一人びとりに、どなたにも直ちに、祈るところにキリストは降っておられるから、我々は祈れるんです。キリストが十字架で私を贖ってしまつて、

「お前の中に私は住んでいるよ。気づいたか」

「はい、ありがとうございます」

と。そこで祈りが出てくる。

そんなもの、普通の生まの人間が殊勝な心で祈れますかいな。祈るとなつたら、「助けてください」でしょ。「試験に合格させてください」「息子によい嫁をください」とか、そういうのが自分の祈りですよ。ええ。「ああしてください。こうしてください」と、そんなのははしはしのことであつて、本当の祈りというのは、

「あなたの御意を私において成就してください。本当に僕をあなたのお使いとしてお用いください」

と、投げ出している。これが祈りなんです。そんな祈りというのはこの肉からは出ない。

「私はお前を贖った。お前は大丈夫だ」

と。これを先生は「根源現実」と言っておられる。霊的根源現実です。

「人間小池は相変わらず罪びとだ。でも、根源現実の小池は真っ白な、まばゆい小池だ。

だから、見える人間小池の奥にまばゆいキリストにある小池だけを見てくれ」

と仰るけど、同じ人間だからそれは無理なんだ(笑)。どれがどつちだかわからない。「これは人間小池」で、「あれは御霊の小池」というふうに分かれていたら、こっちは蹴飛ばして、あつちを受けとるけれども、一人の中に居るものだから、これは大変でした(笑)。いろいろ、皆さん、御苦労だったと思うんです。けれども、先生はいつもそう言っておられたでしょ。

「人間小池を見ないでくれ。小池は矛盾だらけだ。小池は寂しいんだよ」

と。「聖霊があつたら何もいらん」と言っている人間が、「俺は寂しいんだよ。誰か慰めてくれないかね」なんて。そういう矛盾を抱えているが故の涙であり、それ故のいよいよキリストだということ。また、しばしば躓きの小池でもあつた。でも、そういう躓きの小池の奥に光っている、その涙の小池、キリストにすがらざるをえない小池、これをずっと信じぬいた方々がここに集っておられる方々です。

先生の生涯は、小さいときから、5歳でお父さんを亡くしておられるでしょ。そして、妹さんを一番早くに亡くしておられます。それから、父代わりの大黒柱である政美兄さんには、8歳ちがいますから、ずいぶん可愛がつもらつたようです。頼りになる兄貴で、英語を教えてもらつたり、いろんなことをしてくださつた兄さん。そして、お母さんを助けて、本当に孝行息子でした。一言もお母さんに逆らつたのは見たことがないという。いつも「はい。はい」と答えていた。そのお兄さんを失つた。そしたら、お母さんは失明。自分は病氣になつた。もう

ズタズタ。そういうときに、「とりて読め」というのがさっきの言葉です。

信仰の面では無教会畑のリーダー格であったのが、その1950年の大転換を通して、今度は、今までの自分たちの友人、恩師、そういう方々から論難される。キリスト教の外の世界から論難されるのは仕方がない。でも、自分たちの仲間から論難される。これは本当に辛かったと思います。そういう戦いが1950年からの10年間くらいずっとあった。

その戦いも、もう先生はそれ乗り越えて、わが路をまっしぐらに行くという、その時に私は先生に出会った。1959年の秋に京都大学で講演してもらった題が「無的実存」という題の講演だった。その時にいただいたお葉書をここに持っています。

「過日は君たち三人(市川、私市、奥田)にお目にかかって、大変うれしくありました。小生の講演のために特に貴君にいろいろ……、無的実存、歴史的な意味をもつものと信じます。どうか、エマオ会に飛び込んでくる学生がふえますように。クリスマスには12月20日に東京へ来ませんか。お元気で自由なお気持ちでご前進ください。」

という絵葉書を、このときの切手は5円ですね、いただいた。そのクリスマスに行つて、いただいたのがこの『聖意体現―主の祈り―』の本だった。「今秋の楽友会館の集会を感謝して。小池天鐘」と書いてあります。この本をもう何度読んだことでしょう。これは本当に私にとつて導きの書でした。そういう時から私は先生を存じあげているということになります。

●原始福音と使徒的信仰

そこで今日は、「原始福音」ということを先生はいつごろからどのようなようにして仰つたのか。「原始福音」ということと「使徒的信仰」ということ。あるいは「無の神学」、これがどういうつながりになっているのだから。そういうことを私は辿りたくなりました。

さきほどの前半にも、先生が「幕屋」と言ったら、今度は手島さんが「幕屋」を使われるようになったので、自分は「幕屋」をやめた、こうお書きになっています。それで、「原始福音」というのはどういうことでお使いになったのか、というのを辿りました。

私が入っていますこの『曠野の愛』誌第26号は、不思議なんです。それからずっと後に、私は1980年代に先生の所へ泊めていただいた時に、「こんなのを君にあげるよ」と。何と書いてあるかというと「藤井武先生、ご霊前に捧ぐ。小池辰雄」と書いてある。それを、「出てきたから、あげるよ」と言つて、いただいた。その扉のところに書かれているのが、この「原始福音」という文章なんです。ちよつとこれを、難しいけれども、辿ってみましょう。

「原始福音」 天鐘生

旧新約全書はキリストに関わる而もキリストのみ霊たまによる証言の書である(ヨハネ伝5・39、黙示録5・5)。受肉のキリスト・イエスの実存を伝えている四福音書は何といつても全聖書の中心である。キリスト・イエスに於ける聖霊の充満と聖意現成の聖言と聖業の一如一貫の事態、その究極の十字架と復活と昇天の事実、これが私の告白する原始福音(Urevangelium)の中核である。」

「福音」と普通言つてます。その一番の源、根源、「根源なる福音」です。福音と一般に言っているもののもう一つ源流という、そういう意味をこめて、「ウルエバンゲリウム」という。

「誰かがこのような語をもちいていないかと思つていたら、A・ダイスマンが『使徒パウロの世界』なるパウロの伝道地図に於て、イエスが身親しく伝道された地点を指

して“Urevangerium Jesu”「イエスの原始福音」の述べ伝えられた所としているのを発見して空谷の足音の想いであつた。

更に使徒行伝、使徒らの手紙、黙示録を加えた全新約聖書そのものが広義の原始福音である。更に大胆に言うなら、モーセの十言もその根源の質と相に於ては、神のイスラエルに対する信愛の断言命法として福音なので、所謂「律法」の奥義こそは原始の福音であつた。」

この「信愛の断言命法」というのは、初めての方もいらつしやるので申し上げますが、十誠で、「わが顔の前に何を神とすべからず。殺すべからず。盗むべからず」

とか、みんな「何々すべからず」という命令とか禁止という形で言われているいわゆる律法——法律もそうだけれども——そういう「すべし、すべからず」の命令や禁止として人は受けとっているけれども、本当はそうじゃない。本当は、あの言葉自体が、

「汝は殺人せず。汝はわが顔の前に他のものを神とせず」

という、断定的な断定命題なんだと言う。

「なぜなら、私がお前の神だもの。私がお前をあゝのエジプトの奴隷の悲惨な状態から力ある手をもつて、モーセを通して導き出した。モーセを遣わしたのは私だから。そのモーセを通してお前たちをあゝの悲惨な状況から引っぱりだして救い出したのは私ではないか。その私が神であるのに、他の神々を拝むなんてことはありえないね」と。そうやって信頼して呼びかけておられる言葉なんだと言う。

「汝は殺人せず。私がお前の神であり父であるのに、殺人なんかしつこくないよね」と。そうやって信じきつて語りかけている言葉である。だから、それは奥に福音、信愛、信頼と愛に満ちた神の語りかけだ。旧約は律法の世界の恐い世界で、新約は救いの世界で慈しみの赦しの世界だと、そういうコントラストでよく言われますけれども、先生は、

「いや、源は既にもう旧約のアブラハムから始まっている。始めからそうだ。そこに隠れて背後におられるのは霊なるキリストなんだ。キリストがずっと導いておられる」と言われた。モーセが磐を叩きますね、水が迸り出ます。パウロは、

「その磐はキリストだ。霊なるキリストと一緒に旅をしていたんだよ」

と、パウロはコリント書で言っている。もう実は始めから神さまの世界は一貫している。それが歴史的には、あのように旧約時代にはゆがんだ形で現れ、新約になって、いかにも闇と光のようなコントラストをもつて現れてくるけれども、本当はもう始めから、神さまの愛が、信と愛が隠されている。それを露な形ではつきりと現されたのがイエス・キリストだ。イエス・キリストは旧約の中から生まれてきて、しかも、旧約を本来の姿に戻された。旧約の中で見失われていたものをイエス・キリストが引っ張りだされた。そして、ご自分がそれを生きられた。

「旧約聖書というのはすべて我につきて証しする書なり」

とキリストが言われました。だから、隠れた主人公はキリストだ。新約では、露な主人公がキリストだと。そういうふうに一貫して捉えておられる。これが先生の捉え方なんです。ですから、ここに、「大胆に言うならば」と書いてある。というのは、普通にはそう言われてないから。

「大胆に言うなら、モーセの十言も根源の質と相に於ては、神のイスラエルに対する信愛の断言命法として福音なので、所謂「律法」の奥義こそは原始の福音であつた。

これを受けとめたのがイエスで、彼の「山上の垂訓」は律法の奥義の把握であり、告白であった。」

●幸いなるかな、霊の貧しき者よ

「幸いだよ、お前。霊の貧しき者よ」

と、我々に語りかけておられるんだけど、実はキリストご自身の内面の告白だという。「私は神さまの前に本当に霊が空っぽだ。そしたら、ありがたいことに、神さまという天国が私の中に宿った。私は神の国そのものになった。だから、これを受けとれよ」というのが、

「汝ら、悔い改めて、福音を信ぜよ」

と言われた伝道の第一声なんです。神の国が、天国の事態が自分の中に充滿しているからこそ、「あなた方は私のところへいらつしやい。これを受けとりなさい。時は満ちた。待ちに待っていた時が今満ちた。すべてをかなぐり捨てて、私のところへいらつしやい」という招きが、あの

「幸いなるかな、霊の貧しき者よ。天国はその人のものなり」

「時は満ちた。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」

というものの奥義はそういうことだと。それを先生は自分の魂に聞かれたわけです。

「汝、わが十字架によりて霊貧しくされてある者よ」

と響いてきた。そこで、あのキリストの告白であった山上の大告白が先生の告白と重なることになった。それで聖霊のバプテスマがやってきた。そこで、「神—キリスト—聖霊—我」、この四位^{よんみ}一体が成就したと。そういうように仰っているわけです。

「かくて実は全聖書の根底は、アブラハムより先に在りしキリスト即ち原始福音体の^{たま}み霊を以て貫かれた原始福音を源泉源流としていのである。「原始に言葉あり」(ヨハネ1・1)とは、このようなキリストなる霊言ありということである。」

そして、なぜ自分が原始福音ということを言うのかということが書かれています。

「一般に「福音」といわれているものを、私は何故、時にのぞんで特に原始福音というか。それは千九百年のキリスト教史を経るにつれて所謂「福音」なるものがほかのもろもろの文化的諸要素によって混成状態、逸脱状態、不純化、無力化などさまざまの変質変貌を招来しているから、つねに源泉に生命の水をのむ(ヨハネ伝4章)という意味に於て、「原始」なる語をつけざるを得ないのである。」

本当は、「福音」は「福音」でいいんですよ、「原始」と言わなくても。でも、ここに書いてあるように、長い人間の歴史の中でいろんな或る種の変貌をあげている。その変貌がプラスの変貌ではなくて、マイナス的変貌をとげてきている。そこで、はつきりと、現代のキリスト教会の無力化ということが生じている。それで、先生は元の姿へ^{かえ}還ろうと言われた。原始、即ちキリストの時代に、キリストの原始の福音をダイレクトに直に^{じか}受けたのは使徒たちです。ペテロ、ヨハネ、ヤコブという直弟子たち、それからパウロ。こういう方々の中に生々^{なま}しく働いているその福音をそのままの姿で我々は受けとろうと、

「使徒的信仰に^{かえ}還れ」

ということを叫ばれた。実は「原始の福音」ということと「使徒的信仰」とはイコールです。

「ランケが「すべての時代は神に直結する」と語ったが、すべてのキリスト者はキリストの福音をその原始の質と相に於て、直接に体受しなければならぬ。根源的永遠的なものを有たなければ、歴史的現実を真に生き且つ荷うことも出来ないからである。二十世紀のこの危機はこの原始福音からの離脱が甚だしいからである。換言するなら、福音が一般に真に原始の力をもたなくなつたからである。福音の還元且つ前進の途は、み霊による新生を以て始まる。所謂、信仰、信条、教派、神学、主義、主張を超克して、ひたすら全キリストを体受することあるのみ。使徒たちと同質のみ霊の事態に入るまでは、原始が何を意味するかはつかめない。つかむといつても決してそれは我を主体にした把握ではない。それ故に、私は自ら原始福音をつかんだとは断じて言わない。私は限りなく投身してゆくまでである。而も主の十字架復活の恩寵がみ霊にあつて原動力となつて下さるから、私はキリストの賜う平安と歓喜と光と生命と愛に生かしめられる。私の側は罪びとであり、砕けた瓦、塵芥にすぎない。けれども主はゆるし、きよめ、呼び、つかみ、語り、用い給う。

以上の如き事態のために、私は教会や無教会の人々から事実既にここ数年一線をひかれてゐる。併し已むを得ない。「ナザレ人の異端の首」(行伝24・4)とパウロはテルトロに告訴された。ペテロもヨハネも、大祭司や長老や学者らに対して言明して、「我らは見しこと、聴きしことを語らざるを得ず」(行伝4・19)。私もこの福音のためには誰に棄てられてもやむを得ない。「汝らも去らんとするか」(ヨハネ6・67)と呻きたまいし主の福音である。もともと、「言い逆らいを受ける徴」たる主の福音である。けれどもこれが万人を救ひ抱き得る天上天下唯一つなる福音である。耳ある者はこの罪びとのこの告白に和して聖名を讃えろと信じてゐる。

神よ！ このいと小さき僕が棄てられることが、キリストの福音のための徴となつて、翻然としてみ霊の新生を受ける魂を教会の内外に起し、彼らをして真に福音の大歓喜に入らしめたまえ！ 贖主の聖名により、アーメン。」(『曠野の愛』第26号、1957年)

こういう烈しい文章ですね。

●キリストの幕屋

それからその次に引いているのは、『曠野の愛』29号にある文章です。

「武蔵野幕屋は、聖書をその根源現実 に於て把握せんと悲願している。それは聖劇の中に投身すること、聖書の中へわけ入ることであり、福音の原始力につかまれんとすることである。聖言と聖霊の一如なる原始福音を慕い求めている。その集会は満たされつつ、無限に真理を求めてゆく。あがないの愛が集会にコイノニアを展開し給う。これはキリストの幕屋である。主のあがないが「無」罪、「無」私を賜ひ、「無」者たるの十字架の恩寵が、同時に「無限者」たるの復活の恩寵の現実に入れ給う。その意味に於て「無」の教会(エクレシヤ)である。そのようなみ霊の主の幕屋であるから、霊主の幕屋と申してもよい。悲願霊願はただ名実相即にある。」(『曠野の愛』29号、1958年 武蔵野だより)

これも素晴らしい文章です。ここに「キリストの幕屋」と出てきます。「幕屋」というのは、先生が病気で寝ておられる時にヒルティの本を読みながら、閃き^{ひらめ}が来たそうです。天幕の形が浮かんできて、この天幕の形、三角垂体は、上に神さまがいらつしやつて、下にキリストがいらつしやる。そこに大黒柱が立っている。それは十字架なんです。その三角垂体の稜線は、神さまと我々キリスト者一人ひとり、a、b、cという三人(底面の三角形の頂点)。三人居れば立体ができあがります。そして、キリストは下に降りてきてくださつて、キリストが私たちとまた直結してくださっている。神さまによって作られたこの空間に聖霊が充満しておられる。だから、これを「聖霊の幕屋」と呼ばれる。それぞれの所での単立の集会があります。これが全部、「二、三人わが名によりて集う^{つど}ところに我も在るなり」

と聖霊の主は仰っている、そういう聖霊の幕屋だと言う。そういう聖霊の幕屋がこの地上に、何千あるか、何万あるか、いくつも集まっている。それが「キリスト幕屋」です。それが今度、新天新地になりますと、「神の幕屋」になる。だから、聖霊の幕屋は個体としての各召団、集会です。キリストの幕屋は全キリスト教会です。これはもう、そういうものを想像するしかありません。そして、新天新地においては、神の幕屋です。

「神、人と共にいます」

という、ヨハネ黙示録に現されているあの神の幕屋です。

そういう「幕屋」ということを言われた。またこれを手島さんが持つていつてしまった。「原始福音」と言われると、これも手島さんが持つていった。それで先生は仕方なく、「使徒的信仰」と言われた。その消息が1985年9月22日の武蔵野日曜集会(東京キリスト召団)創立45周年記念祭における「日本キリスト召団の歴史的使命」という題でのお話の中で語られています。

それによりますと、小池先生は1942年3月8日、ヒルティの『眠られぬ夜のために』を、ドイツ語でしたけれども、それを読んでいて、それがヒントになって、病床でふと、イスラエルの歴史のことを思いついた。「幕屋」ということが示された。神さまは旅をしておられる。テントを張つて野宿し、また次の所へと旅立つて行くという、そういう遊牧の民ですから。

「幕屋」という言葉をそのときに与えられた。大体、神殿なんかには神さまはお住みにはならないと、ちゃんとダビデにも仰っている。人間が造つたようなちっぽけな神殿に宇宙の神さまが住めるものかと。キリストも言われた。

「この山でもあの山でもない。霊とまことをもつて神を礼拝する。まことの礼拝者を父は求めておられる。今、その時が来ている」

と。キリストはご自身を神殿と言つておられるわけです。

「あの立派な神殿はまもなく滅びる。しかし、私は三日で建ててみせる」

と仰つた。46年もかかった神殿はどうなんですかと言つたら、キリストはご自分の身体をさして言つておられた。復活のご自身を指しておられたということが聖書に出てきます。

●「幕屋」から「召団」へ

そういう「幕屋」、これも持つていかれてしまった。

「そういうようなわけで「幕屋」という言葉が来たものですから、それから使いだしたら、手島郁郎君が「それはいい」と言つて、彼が「幕屋」と言いだして、それで素

晴らしい展開を彼はやりました。そこで、ごつちやにされては困るので、私はそれから今度は、藤井先生が「召団」ということを言われたので——先生は言ったけれども自分では使わなかった——それで、私は「召団」を使うことにした。」とある。それから今度は、「原始福音」については、

「そういう意味で、手島さんと私はとにかく無教会を突破した。「原始福音」という言葉も実は、「福音の原始に帰れ」というスローガンを私が言ったんです。1951年に手島さんと私と関根君でYWCAで講演したときです。」

関根正雄さんは後の旧約の大家です。この関根さんと小池先生は実は阿蘇で一緒だった。同じ体験をそこで一度しておられる。しかし途中から別れられることになった。小池先生が迫害されるようになってから関根さんはずっと去ってしまった。もともとは同じ体験をしておられた。

『原始福音』という名称も私は既に『曠野の愛』に書いています。それからまた、手島君が「原始福音」と言いだした。それで、私は「使徒的信仰」とまた言い換えたんです。手島君は手島君、私は私なので、それぞれ人間的にもあるいは考えの上からも違ったところがありますから。ただ、聖霊の体験において一つということは言えるでしょうけれども。まあ、そんなことで、歴史的にはそういうわけです。」

ということ、先程引用しました『原始福音』をずっと引用しておられます。これは著作集第六巻『随想集』の98頁に載っているそうです。またご覧ください。

ですから、私は一体、「原始福音」ということと、「使徒的信仰に帰れ」と仰ったこととはどういう繋がりがあるのだろうかと思つて、そういう気持ちからいろいろ調べてみたら、実は根は一緒だったということがわかった次第です。

●「キリストの原始福音」

先生の『曠野の愛』誌の第30号、1958年夏の号があります。ここには何と、「キリストの原始福音」という論説が載っている。先程引用した簡潔に書いてあったものを本当に噛み砕いて書かれている。私は付箋を付けたらこんなにくさん付箋が付いた。そこから、ちよつと引用してみたいと思います。さきほどのプリントの「原始福音」の中に、

「すべてのキリスト者はキリストの福音をその原始の質と相に於て、直接に体受しなければならぬ」

という文章があつた。この『曠野の愛』誌の「キリストの原始福音」という論説は藤井先生の、「1958年7月14日、藤井武先生召天28周年の日をただ独り念じつつ」

という書き下ろしの文章です。どこかの講演ではない。それが「キリストの原始福音」という文章です。その中からちよつと引いてみます。いくつかの項目に分かれているんですが、一番目は、「福音を体認・霊知して証人となること」というところに、こんな言葉が出てくる。

「観念にもあらず、御利益にも非ず。ギリシャ人の如き「智慧」の追求にあらず、ユダヤ人の如き「徴」に於て現象を目的にするにも非ず。」

と。よく先生は「四つのものを警戒せよ」ということを仰った。即ち、観念的信仰。これは「研究、研究」といって、非常に知的・観念的になりかねない。それではなくて、あの生き生きとした使徒行伝時代の原始の福音に帰れということを仰った。「観念に非ず」と。それから、「御利益に非ず」というのは、

「聖書は「学者の如くならず、権威ある者の如く」語っている書である。知らぬ間に学問教に移行しているとするなら、これを原始の根本精神に於て再把握しなければならぬ。また他方、民間の新興宗教の如く、御利益的な現象や「徴」そのものを追う人々があるとすれば、これも原始の福音がいかに神の栄光に関する事態であつたかを学びなおさねばならない。観念にもあらず、御利益にも非ず。ギリシャ人の如き「智慧」の追求にあらず、ユダヤ人の如き「徴」に於て現象を目的にするにも非ず。飽くまでも原始の福音はキリストを原因とし目的としてキリストにあつて「生き動き在る」の事態である。」

と。キリストが原因であり目的である。キリストご自身を全的に求めていく。自分の方は全否定である。そういう生き方のときに、パウロは、

「我は神の中に生き動き在るなり」

と言いました。

「パウロが言う如く、「ユダヤ人は徴を請い、ギリシャ人は智慧を求む。されど我らは十字架に釘けられ給いし者たるキリストを宣べ伝う。これはユダヤ人には蹟物となり、異邦人に愚かなれど、召されたる者にはユダヤ人にもギリシャ人にも神の能力、また神の智慧たるキリストなり」である。」

と。それから、「使徒的信仰への同質性」という項目が出てきます。

「聖書という大劇史中に投身して、劇中の人物となつて読む身読に立ち還れよ。聖書の研究は大いになすべし、併し研究が主権者となつたら、聖書は自ら「否！」と大喝するであろう。予言者も使徒も血と涙の実存の中から、その血と涙を以て告白し書かしめられたのであつて、ギリシャ的スコレー（閑暇）の書齋しごと「学校」ごとではないからである。彼らの生活と文字とは火とその焰の如き不可離の現実である。」

原始キリスト教のあの聖霊の内住していた現実に於て示された聖言を読むにあつて、前にも触れたようにこれと同質的に我らがなるのでなくしては、聖書を読むという事態にずれを生じているわけである。使徒的信仰の現実と同質性を我らが有つべきであるところに、現代キリスト教界一般の新しき自覚と課題と進展がある。」

それから、六番目の項目として、「原始・終末・根源の福音」というところから、

「キリスト教という表現はむしろ解説的であるから、キリスト・イエス自ら用い給うた「福音」の語を之に替え、原始キリスト教に替えて、「原始福音」と唱えた方が更に明確と思うのである。……福音の根源相への限りなき追求は、根源に限りなくつらならんとのいとなみは、同時にその根源によつて無限に展開せしめられることであつて、単なる復古、復帰ではない。創造的進展がこの根源によつてなされてゆく。だから福音は同時に質的には根源福音を意味し、啓示的には原始福音であり、原始なるがゆえにこそ終末的である。」

と。これは凄いですね。つまり、本当の根源なるものに還りゆくことが、今度は無限に展開する原動力になる。還りゆくことは、「バックばかりしては、進めないではないか」と普通は思う。けれども、本当の源に還ることが、更に突き進む原動力となり、還りゆくこと深ければ深いほど、出ていくことまたそれが高く長く広くなるという。そういうダイナミックスなんです。これを体験しないといけない。

「もう十字架を乗り越えた。ああ、聖霊は乗り越えた。さあ、次は」

と。これではない。どこまでも、先生の告白している福音は死に至るまで十字架・聖霊でしょ。

●無条件絶対なもの

晩年に告白しているものは全部この1950年代の初期にもうちゃんと出来上がってしまった。そこにもう完璧な姿で在る。それが展開しているだけなんです。それでは、先生は進歩してないのかというと、決してそうではない。非常に広くなられました。広く深くなられました。抱擁力がありました。あの1950年代の先生はこわい。近寄らば斬るぞというような、真剣勝負の世界に生きておられた。グーッと睨み付けられたら、ふるえあがってしまう。それが晩年の先生は、天の一角を睨んでおられるかしれないけれども、本当に好々爺こうこうやという包摂でしょ。昔の先生は、「祈れえ〜っ！」と(笑)、一言、二言、三言、祈りだしたら、もう若い連中は「ウワァ〜、ウワァ〜」言つて、先生が話しても、聞こえなかったじゃないの。1971、2年頃の軽井沢合宿なんかの録音テープを聞きましたら。凄かった。そういう先生が晩年は、

「ワッショイ、ワッショイではない。受けとるんだ。静かな深い祈りだ。上からくだってくる。こっちは徹底的に受け身で、心を開いて委ねていたら、自然とくだってくるんだ」

ということを言われた。相変わらず、先生は、「投身しろ」とか、「跳び込め」とか、そういうことを仰るけれども、質はだんだん広く深くなられた。先生の始めは、ご自分の体験が強烈だったから、「求めの切なるにより」というように、ウワァ〜ッと祈り込んで、ウワァ〜ッと光がくだってくるという、そういう非常にダイナミックなものを、

「体験しろ、体験しろ」

と言われた。体験できない私はどれだけ苦しんだかね。体験した方は、知らぬまに姿が集会から消えてしまっているんですよ。私みたいに体験できない人間はどれだけ苦しんだか。でも、先生は、「それでいいんだよ」と言ってくださったので、しがみついて来れた。晩年の先生は、

「十字架を本当に受けとつてごらん。来ているんだ。十字架が本ものだったら、聖霊は来ているんだよ。十字架と聖霊はバラバラではない。一つだ、ワンセットだ」

と言われた。これは大事です。歴史的には、十字架があつて、復活があつて、昇天までが四十日あつて、それから十日間の祈りの後に聖霊がくだりました。こういう順序があつた。これが今ワンセットになつて、私の中にドカーンとやつて来ている。これが恵み、絶対恩寵おんちようなんです。

「あんなやつが何もせずに救われて、腹たつじやないの」

と、皆が思うでしょ。昔のパリサイはそうだった。キリストが無条件に赦してゆかれるでしょ。誰も彼も無条件に赦す。腹が立ってしょうがないわけです。

「俺たちはこれだけ生命賭けでやっているのに、あいつらは何だ」

と言つて迫害してたんでしょ、パウロだつて。それがもう無条件降伏の世界に入れられた。

小池先生も、始めは自分が苦しんで、あの聖霊の世界に入った。かなり烈しい祈りの修行もなさいました。三日間、八溝山やみぞに籠もつて断食の祈りをやったとき、その三日目に滝の中に入ったら、みんな聖霊のバプテスマを受けてしまつて、えらいことになったとか、そんなことを仰っています。それはさもありなんと思います。

いろんな霊的な体験をなさったけれども、それを先生は表に出されなくなつた。本質、根源、

それをしつかり掴みなさいと。万人に開かれた無条件絶対なものを——条件のついているものはだめだ——「はい」と受けとる。これだけは条件なんです。「はい」と受けとることを拒むこともできる。人間は自由な存在ですから、人間は「はい」と言うか、「ノー」と言うか、これは人間の主體的な判断ですけれども。それ以外に「これこれのことをしてから、出直して来い」ということは一切仰らない。

「聖霊のバプテスマ」ということも、先生はそうのように晩年においては、現象としての聖霊のバプテスマは仰らなくなった。もつと根源の本質において、

「本当に十字架が受けとれたら、もうその時に聖霊は来ているよ」

と、そう仰つてくださった。私もその通りだと思つています。そうでなかったら、何か体験に裏付けられなければ聖霊が来てないのだったら、そこで二つに分かれます。体験派と無体験派に分かれます。私たち落ちこぼれはこっちの方で独り悲しんでいなければならぬかもしれない(笑)。けれども、そんな世界ではないということです。

●南無キリスト

さきほど申しましたように、根源なるもの、本質的なものはもう1950年代の初期のときに、先生に全部、全き姿でもう宿つていたということに私は驚く。実に、46年はその展開、深まり、広がり、それでしかなかったと私は思つてます。何の違和感もない。

「福音は同時に質的には根源福音を意味し、啓示的には原始福音であり、原始なるがゆえにこそ終末的である。」

という。原始ということと終末というのはワンセットです。これもまた大事なことです。始めと終り、これが繋がっている。福音が宣言されたとき、キリストが伝道なさったときは、もう神の国は間近であるという迫りの中で語つておられる。その迫りという質を見失ったら、伸びきったゴムひもみたいになつて、パンツはずれ落ちるんです(笑)。本当に福音をぐつと引き締めているものは、「終りは近い」というこの迫りなんです。ペテロも言つてます、

「世の終りは近づけり。だから、慎みて祈りを深くせよ。愛を深めよ」

と。これがなくなったらだめです。原始と終末は質的につながっているということが大事です。

「イエスは聖国の到来を望み、終末的現実を歩き、終末を深く祈りつつ突破されたのである。」「我は原始^{アルバ}なり、終末^{オメガ}なり」とは旧新約聖書を貫く神である。またこの神と偕^{とも}に在るキリストである。原始キリスト教と言おうと原始福音と言おうと、終末福音と言おうと、根源福音と言おうと名称はさして問題はないが、受肉、十字架、復活、昇天、聖霊降臨、再臨のキリストの事態、即ちイエスに於ける啓示の事態が福音であり、イエスによつて始められた福音であるから、原始福音と申すのがむしろ自然であると思うから、私は自らの自由と、責任に於てかく申すのである。ある方面から非難を受けたが私はそれは論議にも値しないことと思う。」

と、こう言つておられる。そして、「(七)「無」の教会(エクレシヤ)、幕屋」と続きます。それから「(八)原始福音即全キリスト」というところに行きます。

「私はむしろキリスト・イエスの全実存とこれをつたえた全新約聖書の証言内容を原始福音と申したい。そしてこれを新約聖書記者と同質的に把握せんとするところに、原始福音と特に原始を冠する所以^{ゆえん}があるのである。……

イエス・キリストは福音の主体である。それ故に原始福音というときは、その言の最も烈しい意味に於ては全キリストを指す。キリストという啓示的具体的恩恵の主体そのものが、私にとって原始福音である。」

こう言っておられる。要するに、イエス・キリストが全てだということなんです。その本源に還ろうという。それがやがて、「エン・クリスト」という表現になって現れてきます。「絶信の信」とか、そういうことを仰います。

「私は心から告白する。絶信の信が、本質的な信仰であり、絶真の真が、天的な真実であり、絶言の言がキリストにあつての言であり、絶霊の霊がまことに聖霊に在る事態であることを。これはみなキリストの十字架によって「絶」し得るからなのである。」

と。だから、いかなる人間世界の相対的なさまざまなものも、それを乗り越える道は十字架しかない。十字架において初めて乗り越えている、既に。人間が自分で乗り越えようとしたって無理だ。十字架が全部、相対的なものを乗り越えさせてくださっている。

●絶対的な愛

主義主張の争い、教派の争いは全部、おのが主義、おのが教派という相対的なものを絶対化するところから起こっている。

「あいつは間違っている。あれはどうだ」

とか。それを突き抜けた、突き抜けをくださるのは十字架です。これは無なんです。もう何も無い。己がものというものは何もない。光だけが、神さまの絶対的な愛だけがそこにある。無限無量がそこにある。一切を包み込む。排除ではない。包み込んでしまうという、この世界に突き抜ける。これを「絶信の信」と言われた。おのが信仰に絶する。

「信仰なんかありません」

と、よく先生は叫んでおられました。だから、この「絶」という字を「無」と置き換えてもいいという。

「この「絶」の字を「無」で置き換えても同じである。無義の義であり、無心の心である。……無即無限である。……かかる恩寵の現実はまさに絶言絶語である。思いこみでも形容でもない。キリストのみ霊の生命であるからである。人はいざ知らず、私の信仰生活に於ける恩寵の体験がかく証言する。キリストという「信」が来たり宿り給う。」

「キリストという信」が私の中に宿った。キリストという信は凄い。山に向かって、動けと言ったら、動くんですからね。無花果の木に枯れると言ったら、枯れてしまうんですから。「信じて祈りたることは必ず成る」

と、こう仰ったのがキリストの信でしょ。そういうキリストの中に宿った信が私の中に宿る。十字架を通して。「それが私の信だ」と先生は言っておられる。

「何たる有難さぞ！ 祈りが呼吸の如く自然で深くなる世界が開示してくる。」

それから、いつも先生の大好きなガラテヤ書2章20節が引かれている。

「我れキリストと偕に十字架につけられたり。我れ生く、されど最早我に非ず、キリストわが内に在りて生き給うなり。」

御霊のキリストがわがうちに生き給うなりと、これが引かれております。

そして、そこからまた、祈りということが出てくる。祈りなくしては本当にこの信の世界は開けてこない。さきほどの根源的な現実、それと本当に同質的な一如に入れていただくためには、こちらの側では祈りです。先生は、

「祈りとはキリストの中に自分を委ねることだ。『主さま!』という一言の祈りでいい」と、晩年はそう言っておられます。

「主さま!・南無キリスト、主さま!」

と。ただ一言の祈りでも主は宿っておられる。こんな簡単なことはない。「南無阿彌陀仏」と、それで良かったんですよ。「南無妙法蓮華経」と、これで良かったんですよ。我々の方は、

「南無キリスト。南無主さま!」

と言う。「主さま」と、その一言で、もう主は来たり給う。

「主さま、ありがとうございます」

と、それ以外に何があるんですかと私は申し上げたい。引き換えできないんです。「主さま」とお名前をお呼びして、主が宿ってください。

「お前は問題ないよ。大丈夫だ。私がついている。そのために私は十字架にかかった。

そのためにこの汚い世界に住んだ。そのために我慢して、住み辛き世に住んだのではないの?」

と。そして、善いことばかりなされたですよ、キリストは本当に。涙が出るほどのことをなさった。それで報われたのは何かというと、十字架の死でしょ。こんな損な生涯はありませんよ、本当のところ。よく考えてください。「俺はついてない」とブーブー言うけれども、キリストと比べたらキリストほどついてない人はいませんよ。

だいいち、馬槽うまぶねの中で生まれたというでしょ。最後はあのような無惨な死です。しかも、自分に原因があつて、そうなるならともかく、キリストご自身は何の原因もない。我々人間どものために代わりに死ななければならないという義理も何もない。そうでしょ。皆さん、誰かキリストに貸し与えたことがありますか、その引き換えに死んでもらうとか。何もないんですよ。一方的にキリストが地上に来てくださって、神の御意みこころをあのような形で告白し、そして、

「私を見た者は父を見たんだよ」

と言ってくださいって、無条件絶対の世界を開いた。最後は、その恵みを受けた者たちが寄つてたかつて、「十字架につけろ!」と叫ぶ群衆になつてしまったわけでしょ。弟子たちは逃げてしまったでしょ。キリストは十字架にかかつて、

「父よ、彼らを赦し給え。わが霊を御手みてに委ぬ」

という祈りをなさった。このキリストが

「お前のためなんだ。お前を救うために、私はこれを全部引き受けたよ」と言ってください。

●砕かれてくださったキリスト

私は、小池先生の福音でありがたいのは、「十字架で身代わりになつて死んでくださった」とか、そういう言い方をなさらない。「引き受けた」と言ってください。これは私にピッタリくるんです、

「お前のことは引き受けたよ」

と。「私が十字架で付けられて死ななければならぬ死をキリストが身代わりにあそこで死んでくださった」と、そういう言葉で言われても、「ははん、そうですか」ではだめで、「引き受けた」ということです。

「お前と私は一つだ。ほら、十字架を見てごらん、もう片づいている。お前はすつ飛んでいる。お前はもういないよ」

と。「えっ、どこですか」と。

「いや、お前の知らないところで、私ひとりで全部片づけたんだよ」

と。膨大な借金があると思ったら、何もない。いつ誰がどこで？

「私が十字架で全部片づけたからね。いや、お前一人ではない。すべての人を」

と。すべての人、生命あるものごとく。そして、生きとし生けるものごとく。自然界も万物も呻きがありました。パウロの祈り、呻きです。

「自然界も、神の子の出現を待つて呻き苦しんでいる。御霊の実をいただいた我々も、身体とりなの贖われんことを望んで呻いている。御霊も言いがたき呻きをもつて執成とりなしてください」

と。そのロマ書8章。全部、キリストがなさつて、今も天界で祈つてくださっている。

この我々、今生きている者も、過去に生きた人たちも、これから生まれてくる人たちも、地球上の存在のために、その根源的な業しごうというやつを引きうけて、そして碎かれてくださった。これはもうキリスト以外に誰があるか。

我々日本人には、お釈迦さんのような世界が本当は親しみやすいんです。涅槃の世界で、すーっと眠りに入つて、「ああ、小鳥たちも喜んでいて、草花も喜んでいて」と、美しい世界ですよ。お釈迦さんはずいぶん苦勞をなさつたでしょうけれども、美しい世界で、贖あがないというものが無い世界なんです。日本人には向いているかもしれない。けれども、私にはやはり、キリストさまが十字架で引きうけたと、

「お前のことは引きうけた。お前のみならず、お前の全家族のことは引きうけた。任しておけ」

と言つてくださる。これがあるがたい。本当にありがたい。何かお返ししたいけれども、何も要らんと仰つた。

「うれしかったら、飛び跳ねろ。そして、救われたあと叫べ。キリストは愛だ、すごい！

と。それでいいよ」

と。「やむを得ざるなり」なんです。「伝道せねばならない」なんてウソですよ。「伝道しなかつたら、天国に入れてもらえない」なんてウソです。本当にキリストの生命に溢れたら、人間は黙つておれない。「赤ちゃんが生まれたんや。よろこんで。お祝いしよう」とみな言いますね。「今日、ぼくの誕生日や。みんな来て」と。「結婚式に来てちょうだい」と。みんなやはりそうやって、うれしい時は一緒に喜びたいでしょ。その一番うれしい喜びをキリストはくださったんです。「これから何をしたら、いただけるか？」ではなくて、もうくださった。

「備えは終われり、いざ来たり給え」

なんですよ、本当に。それを今、霊の現実において、すーっと受ける。朝、光がすーっと射し込んでくる。光は燦々さんさんとふりそそいでいる。もう、気づいても気づかなくても、光は燦々さんさんとふりそそいでいる。闇は光に勝たなかった。光が来たら、闇は消えた。あのヨハネ伝の第1章の

世界が成就してしまっているんです。

これが小池先生が我々に語り伝えてくれた、生涯をもって告白し続けてくれた福音なんです。
「使徒的信仰に帰れ」

というのは、そういう現実を今生きようということです。ありがたいでしょ。

「では、仏教は？ 仏教だつて素晴らしいじゃないの」

と。私は仏教を全然、なおざりにしません。仏教も素晴らしい。でも、仏教が本当の力をもつためには、仏教の方は仏教の中で祈りこみなさい。お釈迦さんの世界に祈りこみなさいよと。一緒に祈ろうか。私はキリスト、「南無キリスト」と言つて祈る。向こうは「南無阿弥陀仏」と祈る。いいじゃないの。祈る方は我らを絶した方なんだから。

とにかく、自分に囚われているのはだめなわけです。自己執着がだめなんです。己が無いというのが無の世界でしょ。それを十字架がくださった。「自分で無になろう、無になろう、無になろう」なんていう、坐禅でも何でも無い。悟りではない。もう来てしまっているという。だから、この十字架は本当にありがたい。身体の中に十字架が立つてごらん、そこに聖霊が来ておられるんだから。

●キリストの霊気

皆さん、呼吸は自然にやつておられるでしょ。今の今まで気づかないで呼吸なさっていた。寝ている間も、呼吸なさっていた。ウソだと思つたら、呼吸をやめておられたら、朝めざめていないですよ(笑)。朝目覚めたということは、呼吸をしてたというわけです。

魂はキリストの霊気を吸って生きています。魂はキリストの霊気を吸います。人間の身体は太陽の光を浴びて生きます。我々の霊的存在はキリストの霊気を吸って、キリストの光を浴びて生きます。太陽は我々に対して何ひとつ求めない。生まれたときには既に太陽は照つて、輝いていました。キリストは既に、私が生まれてきた時は、キリストは輝いておられました。では、「旧約の人たちはどうなるの？」と。

「アブラハムの生れいでぬ先より我は在るなり」

とキリストは仰つたでしょ。だから、ちゃんと隠れたところで導いておられた。キリストの苦しみの故に、私たちを本当に大肯定の世界に入れてくださっているんです、始めから終りまで。ただし、サタンという悪いやつがいます。その霊力、これが我々にいろんな禍害(わざわい)をもたらしたり、不信感を与えたり、疑いを起こさせたりする。このサタンという霊力に絶対に引つけられたらいけない。そのためには祈っていないと。そのためには絶えず十字架の前で祈っていないと。でないと、危ないですよ。もし、「自分が何ものかになった」なんて思つたら、大間違い。どこまでも平伏(ひれふ)しです。先生は「砕け」ということを仰つた。平伏しの世界でキリストだけを見て行きなさい。他のものに目を移してはダメですよと。

サタンという霊力があるかぎり、本当にこの世は危ない。いろんな現象が今、全世界に起こっています。全部、サタンの霊力がもたらしている現象だと私は見ている。おかしすぎますよ、今の世の中のいろんな、インフルエンザだつて何だつて。その他もろもろの災い、事件。本来、神の子である人間が、なぜこんな狂える姿になつてしまっているのか。因果をたどれば、いろいろ説明はできましよう。もつと根源的なところで、人間どもを惑わそうとする霊、霊力。自然を破壊させようとする霊力。そういったサタンと呼ばれている霊がはたらいている。これは

黙示録にちゃんと書いてます、最後に審かれるときが来ると。それまで、我々は、

「目を覚まして祈っていないさい」

とキリストは言われた。終末の迫りの中で目を覚まして祈っていないさいと。終末はいつ来るか知りませんが、私たちが質的にキリストが生きられた本当の天国を間近に望みながら、今というものに全力投球して生きなくては。その生き方を私たちは生きている。キリストのこの生命は私たちの中でそれをさせてくださる。だから、不思議な世界です。そういう無限無量の大きな宇宙の中に抱かれ、一番高い絶対次元からの光が射し込んできて、正にこの相対次元のややこしいゴタゴタの世の中で生きることとをさせられている。しかも、99%は相対次元に生きていて、わずか1%くらいが絶対次元からの光と生命の中で生きている。それでその99%をやっつけていくんですから、実に我々の生き方というのはもの凄く奇蹟的な生き方をしている。我々の存在、歩みそのものが実は奇蹟です。絶対次元だけの世界に住めば、それはそれでスィスイいきます。相対次元だけの世界で、その論理でいけば、またいきますよ。そのかわり、勝者があり敗者があり、不幸なやつがおり幸福なやつがおるところです。私たちはそういう相対界の中に身を置きながら、しかし、絶対次元の質をいただいて、同質的に生きている。それをキリストさまが天界から助け、どん底から担い、聖霊という生命で生かしてくださる。

「常に我は勝ちえて余りあり」

という、そういう世界に生かしてくださる。

これを証言するのは、人間どもしか証言できない。皆さん、一人ひとりの存在がキリストの証言者なんです。どの方も同じ証言はできない。これが人間の尊厳というものです。一人ひとりが人格なんです。画的ではない。そういう人間の尊さということを子どもたちに知らせないといけない。世の親たちに知らせないといけない。人間を本当に尊ぶということは、根源に還って初めて人間を尊ぶことができるわけです。その根源なるものを全部、洗い去って、今の現象世界、相対界の世界、科学の世界、そういう世界の中で閉じこもって、何かをやるうとしているところに今の世の中の大きな間違いがある。体外受精の問題とか、産み分けの問題とか、ああいった人間の生命の根本に関わる問題、それからいろいろ、クロノンの技術だとか何だとか、あまりにも科学的な知識が先走りすぎて、本当の人間の根源なるものがお留守にされてしましよ。危機的です。

我々はまぎれもない現代に生きています。しかし、その現代に生きている我々の中にこの根源なる福音が今も生命^{いのち}し、生き生きと生きていく。終りが近ければ近いほど光は増し加わって輝いて、闇と光のコントラストが烈しくなっていく。その証し人として、皆さん一人ひとりが立てられている。これが、小池先生が我々に語り伝えていらつしやるメッセージであると思う。

●「エン・クリスト」

『エン・クリスト』という雑誌を始められたのが1980年です。その創刊号を持つてきました。ここに、「エン・クリスト」という題で先生が書いておられるのをご紹介します。

「神は罪を知り給はざりし者を我らの代りに罪となし給へり。これ我らが彼に在りて神の義となるを得んためなり」(コリント後5・21)

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。キリスト・イエスに在る生命^{いのち}の御霊^{みたま}の法^{のり}は、汝を罪と死との法より解放^{ときほな}したればなり」(ロ

マ8:1,2)

「我れキリストと共に十字架せられたり、最早^{もはや}われ生くる非ず、キリストわが内に生くるなり」（ガラテヤ2・20）

パウロの手紙には、「我れキリストに在りて」「主に在りて」「彼に在りて」「キリストわが内に」等の、キリストと我々各人との内在関係やキリストとの一如の霊的現実を表わしている用例が多々ある。十字架の贖罪に与^{あず}かる祈りで聖霊が降臨してくると、『エン・クリスト』『キリストの中に』という信仰の霊的現実で生き始めるのである。これが使徒的信仰の本質である。我々はこの信仰の証者として生き且つ福音を伝えよう。栄光、主の聖名にあらんことを！」

と。「十字架の贖罪に与^{あず}かる祈り」とあります。十字架のあの贖い。それに与かる祈り。そこで一つにされる祈り。

「祈りの中で本当に十字架を深く瞑想しなさい」

と、よく小池先生は仰った。キリストが湖を渡ってこられる場面、そういう場面を瞑想して祈りなさいとか。パンを分かち与えている場面がある。五千人の方々に分かち与えている場面とか。按手して祈っておられる場面とか。旅人の姿で近づいてきて、エマオの村に着いて、パンをさいておられる姿とか。ああいったキリストのいろんな姿が福音書で描かれている。そういう場面を髣髴^{ほうふつ}と想い浮かべて、そしてその中で祈りなさいということを先生は仰った。

私がU君を通して啓示をいただいたときも同じことが、その啓示の中にありました。1971年12月29日の夜でした。

「キリストの場面を髣髴^{ほうふつ}として想い浮かべて、その中で祈りなさい。大きな声を出して祈る必要はない。深く祈り入りなさい」

と。そういった十字架、そこで一つにされる。いやもう、一つにされているよと。そういう十字架の贖罪に与^{あず}かる祈りで聖霊は降臨した。十字架の贖罪即聖霊です。十字架と聖霊は切っても切れない。十字架の立っているところに聖霊が充滿しています。○の中の十字で表される。聖霊は○で表される。十字架が本当ならば、必ずそこに聖霊が来ておられる。十字架で私たちは完全に片付けられている。真空のまま放っておかれない。そこに聖霊が宿る。それまでの我々はゴタゴタしたものがいっぱいあって宿ろうにも宿れない。キリストは地上では馬槽^{うまぶね}があつたからそこに宿られたけれども、我々の中には馬槽すらもないかもしれない。宿れない。それをキリストは十字架できれいに片づけた。片づけたのを放っておいたら、七つの悪霊がまた戻ってくるかもしれない。そしたら、「元の状態より悪くなる」と。きれいに掃除ができあがっているから。「七つの悪霊を引き連れて宿る」というようなことが書かれています。

●ゼロ＝無限大

キリストは十字架できれいに片づけてある。「はっ、気づきました」と言った瞬間に、もう聖霊はそこに宿っておられる。十字架とキリストは一つです。そこでのみキリストは私たちと出会ってください。十字架の門でキリストは私たちと出会ってください。そしたら、その無は——ナッシングですね——その無は即、無限無量です。

「ゼロ＝無限大」（0＝∞）

という公式をよく書かれました。「ゼロ＝無限大」とか、「無即無限無量」とか。それも「賜^{たまわ}

たる無」とくりかえし仰った。十字架で賜りたる無。それを深くいただいていると、そこから無限無量の展開をとげていく。自分の方の力みも何もない。ありがたくて、ありがたくて。しかもそれは日々にそうなんです。気がついたら、それ。

恋人同士だったら、気がついたら愛と言うでしょ（笑）。気がついたら愛。いや、愛よりも恐れがあるかもしれないね。恋人にいつ捨てられるかもわからない。いつ裏切られるかもわからないのにと。そんな恐れの世界ではない。気がついたら、キリストの愛。目が覚めたら、キリストの愛。キリストの包み、抱き、担い。こんなありがたい世界がありますか。何でこんな素晴らしいものを世の中の人は相手にしてくれないんだろうと、本当に不思議でしょうがない。何か凄い発明をしたら、報酬が6百億円だってね。だから請求額の2百億円はまるまる差し上げるとか。凄いね、あの何とかダイオソートとかいう発明は。キリストのくださる世界はそんな何百億円で買えるものではない。そんなものと引き換えできない。そのくらいのものです。本当に皆さん、それを自覚してくださいね。あんまり安直にもらいすぎたから、ありがたく思っていないのかもしれない。本当にこれありがたい。

「本当にこれありがたい」

と、これを皆さんに言うてほしいんですよ、私は。本当にありがたいと。無代価で何の条件も付けずに、「そっくり受けとれよ」と言われるんです。

この世は、お返し——もらったたらお返し——たえずそれがあるわけです。「あれだけのことをしてもらったら、これだけのことをせねばならない」とか、「これだけのことをしているんだから、少しはやつたらどうなの」とか、たえず、そういう計算づくで動いているような世の中なんです。「皆持つてきたが、あいつは持つてこない」とか、そんなことを言う。計算づくで動いている世の中です。キリストの世界は計算が全くない世界です。だから、普通の人にとっては受けとりがたい。けれども、それを受けとらないではないという人にとっては、もうありがたくてありがたくてしょうがない。本来、人間は受けとらないでは生きていけない存在なんです。誰ひとり、「我がうちに永遠の生命あり。我を見し者は神を見しなり」と、誰も言えないでしょ。キリストさまだけが

「私を見た者は父を見た。私の中に父がおられる」

と言われた。我々は何も言えない。けれども、

「私を見たのはキリストを見たのです」

と、一人ひとりが言えるわけです。何となれば、キリストさまが私の中に占領してしまつて、私は自分の体を差し上げて、キリストがお宿りになった。私は家主です。キリストというお方が宿つてくださっています。私は家賃はもらいません。もらうものは、凄いキリストご自身が来てくださったので、もうありがたくてしょうがないと。そのような思いで福音書を読み、パウロの手紙を読み、使徒行伝を読むことです。

先生も、使徒的信仰の初期の頃は、私は非常に現象面が強く出ていたと思う。実にさまざまな神癒の業とかいろいろなものが伴いました。それに引かれた人もあり、躓いた人もいた。でも、晩年の先生はそれを表に出されなくなつた。深まつたと私は思います。

使徒行伝も、表面を見てごらん下さい。凄いみ業が現れているでしょ。それに躓いたらダメです。その背後にある永遠なるもの、それに目をとめて、それが今に至るまで生き続けている。パウロはコリント前書13章で何と言っているか。

「知識は^{すた}廃れ、^{いげん}異言は止み、預言も止む。山を移すほどの信仰があっても、愛がないなら私は空しい。どんなことをやっても、それは一時的なものだ。永遠に続くものは信仰と希望と愛。もっとも大なるものは愛である。」

と言っています。そして、

「私たちが^{おきな}幼子^のときは幼子のように考えた。大人となった時にはもう子どものことは捨てた。そのように私たちは霊的に成長して、やがて^{みくに}聖国に迎えられた時は、今知られたることく私たちも全く知るようになる。今見るころはおぼろである。しかしながら、かの時には全く今知られている如くに知る。」

と。神さまの方から全部知ってくださっている。キリストは全部知ってくださっている。それでも、私たちは本当に一部しか、かけらしか知らない。しかし、無限無量の広がりをもって私たちを包みこみ引き上げて行ってくださっている。そういう世界を先生は生涯を貫いて告白してこられた。そう私は受けとっています。だから、先生の最後のメッセージは十字架の愛、聖霊の愛。これに尽きているんだろうと思っています。それでは、終りといえます。

●(祈祷会) キリストに圧倒されている

いやあ、凄いですね、今の先生のビデオは。あれは92歳の1996年4月7日の復活節のビデオです。その8月29日に天界に往生なさったんですけれども。その4月のあとの6月に京都のペンテコステに小池牧子さんと来てくださった。それから2か月とちよつとで、3か月に満たないうちに天界に往生なさったわけです。今のこの迫力。いやあ、やはり先生のテープは5分でもいいですね。我々の感話だ何だというのは長々とやっていますけれども、先生のは5分で圧倒されます。いやあ本当に、92歳にしてあの迫力。声の質も凄い、天来の響きです。

「私は何もない。キリストに圧倒されているだけだ。力が来てしようがない。光が来てしようがない。熱が来てしようがない」

と言われる。それが私はないんですよ。「ありがたくてしようがない」と、これは言える。その前の方が何も言えないな。まだまだ、青二才でございます(笑)。

「私はもう圧倒されて生きている。『主さま!』の一言の祈りであとはなにもない」

と仰る。先生はもの凄く正直なお方です。本当に正直なんです。あれがあまのまんまの先生なんです。「もう、何も言いたくない」という感じでしょ、始めの方は。「仕方がないから、しゃべるけど」という感じです。本当にもう絶言絶慮です。「もう、言葉がないんだよ」と言われた。

「語らず言わずその声聞こえざるに、その響きは天地にあまねく」

という、そういう次元です。そして、それは何かというと、キリストさまに圧倒されている。

「キリストさまというのはどんなお方か。大変なひとだ」

と。「大変なひとだ」と、それしか言いようがない。このせりふは懐かしい。「大変なひとだ」と。「小池はしようがないやつだよ」と。「幕屋」のお話も出てきました。「祈り入る」ということも出てきた。

「自分をキリストの中に投げ入れる。圧倒される」

と。これを本当に私たちは身体でいただきました。本当にもう皆さん、いただきました。あられるんですけれども。あの次元に、やはり我々を入れていただかないとね。まだまだ青二才です、本当にそう思いますよ。でも、先生は「自分の功績ではない」と言っておられるから。

「自分ではない。大変なひとにしがみつかれてしまったからだ。大変なひとにとつ捕まってしまったから、もうありがたくてありがたくて、楽で楽ではない」

と仰った。本当に先生のお身体というのはもうズタズタだったそうですね。ご親族から聞きましました。もう1年半ほど前から、ちよつとした脳梗塞とか、あるいは癌とか、そういうものが始まっていた。1年半ほどもう始まっていたのに、先生はそういうことを我々に感じさせない。あのように「百歳を突破する」とはつきり言っておられる。その直後に「明日^{たふ}仆れてもいい」と仰ったんで、よかったですけどもね（笑）。ま、そのくらいに超越して生きていかれた。私はただ一事、残念なことがあるんです、詩の『天国篇』を先生に書いてほしかった。

『ダンテにまさる『天国篇』を書くぞ、書くぞ』

と言っておられた、それが未完で終わつたというのは残念でしょうがない。そんなことを言うのと、「お前も早くおいで。天国篇は向こうで書いているから、お前もおいで」と仰るから、「わかりました」と（笑）。そういう突き抜けた魂です。先生は「いわゆる学問ではない。何々ではない」と言われることが形容詞ではなくて、本当にそのものずばり、存在そのもので語っておられるということがわかります。

今日のお話を聞いて、私は心痛みましたのは、先生の生涯がやはり無教会との戦いであつた。それが死に至るまで。いや、先生はもう突破しているんです。突破しているけれども、「無教会の先生で90歳までいった人はおるかね」と（笑）。あれだけ聖霊によつて変貌した先生を叩きまくった、その者のために先生は執成しの祈りをされ続けてきた。それでも遂に受け入れてもらえなかった。しかし、

「義の勝利はこれではつきりしているであろう」

ということです。無教会の先生方は集会が終わつたら、「ああ、もう疲れた」と言つて月曜は休息する。先生は、

「私は力が上から来てしょうがない。私はそういう先生方を尊敬はするけれども、聖霊の次元と人間の知恵の次元とははつきり異なる」

と、それを仰ったんですね。それで憎まれた。聖霊の次元というのは、先生自身があの阿蘇の体験をなさるまではわからなかった。だから、

「無教会の先生方、兄弟方、同世代の方々、どうぞこれを味わつてほしい」

という祈りだつたけれども、捨てられたわけです。その、ある面では残念さ、悔しさ、何とかわかつてほしいというお気持ちはずつと流れていたということに、今のお話を聞いて、よくわかりました。天上で祈つておられると思います。

●戦いの人生

先生の生涯というのは本当に前半は、ご家族の中の試煉の連続で、そして、聖霊によつて突破して、本当に自由無礙^{むびげ}のところに導かれたら、今度は仲間からの迫害に耐えなければならなかったという、これまた戦いの人生です。運命と戦い、信仰の戦いをまた戦わねばならない。本ものになったがゆえになんです。無教会の中にいたときは、先生は尊敬もされ、信頼もされ、次のリーダーとして囑望^{しよぼう}されておられた。それが聖霊によつて生まれ変わったばかりに迫害を受け、異端視されるという、その戦いだった。さつき司会者がルターの『神はわが櫓^{やぐら}』は信仰の戦いの歌だと言いましたが、本当に先生自身はそういう気持ちで貫かれた。

だから、私たちはその面の先生をしつかり受けとらなければいけない。私たちにとっては、そういう戦いの経験なしで、次の世代へ入れられている。私は先生と28年の開きがあります。ちょうど親子の年齢ですね。先生がパイオニアとして本当に血みどろの戦いをしてきた。その後の華、あるいは果を私たちがいただいている。だから、やはり私たちは、一番本質的なところを、一番大事なところを——枝葉ではない。どうでもいいことはどうでもいい——本当にこの21世紀、22世紀のこれからの歴史を貫くような奔流をしつかりいただいて、そして、私は世界にアピールしていきたい。日本のキリスト教界はどうでもいい。世界が「本当に小池福音はすごい」と言ったら、日本の教界は目覚めます。日本の国というのはそういう国なんです。ノーベル賞をもらったら目覚める。世界のコンクールで一等になったら目覚める。そういう国なんです、古来から。己がわからない国なんです。己の中の善さが分からない。

私たちはそんなちっぽけな教派だとか何だとか、教会だの無教会だのとか、あるいは神学的な論争とか、そんなものは突き抜けていく。先生がキリストに、あの大変なひとキリストに——これはもうはつきり、霊なるキリストです——復活されて今もありありと現れてくださる霊なるキリストに、

「そのキリストに圧倒されて私は生きている」

と言われた。そのラインをしつかり受けとつて、これは万人に開かれた道で、いかなる他宗排撃もしない。仏教であろうが、神道であろうが、その他あらゆる宗教の、本ものであるならば、本ものを求める道であるならば、これはあらゆるものと手をたずえていくことができる。

向かうのは太陽一つですから。我々が向かっているのは霊の太陽でしょ。ちょうど、霊の太陽の姿をこの宇宙の太陽が表してくれている。私はそう受けとっている。あの澄みきったアルプスの大気は聖霊の澄みきった霊氣を表してくれている。その山中の真清水が聖霊の水を表してくれている。

そういうふうにして、肉なるもの、見ゆるものが先にあり、その次に、見えない本当のものが示される。それは肉なるものを否定しているのではない。それを包んで生かしている。その中に私たちは生かされつつ、それを突き抜けて、本ものに触れる。だから、聖霊によつて目覚めた方はみんな自然が慕わしい。山に向かつて叫びたい、木々に向かつて叫びたい、小鳥に向かつて「ああ友よ」と叫びたい、生命の喜びを共にしたい。そういう喜びに満ちて共に歌おうよという、あのフランチェスコの祈りがありました——詩篇148篇からきていると思います——ああいった、天地宇宙全部がこぞつて聖名を讃えよう、あらゆる差別区別を乗り越えていく。それが本当に愛しい。

●ナッシングに徹する

そして、見分けるのはどこかというところ、己を主張しないことです。これを先生は叫んでくれた。

「己に絶しろ。自分の主義主張にこだわるな。本当のだけを相手にしろ」

と。「では、あんたは？」と聞かれると、

「私は何もないよ。私はナッシングだ。キリストもナッシングだ」

と。人間というのは自分をサムシングにしたい。「他者に対して自分はこういう優越性がある。だから認めろ」とアピールしたい。これが全部、入学試験であろうと、選挙であろうと何でも、マニフェストをつくつてアピールしてと。ところが、先生の行かれる道はナッシングです。

「私がナッシングに徹したら、神さまというどこでかいものが入りこんできた。もうその前には何もない。『主さま、ありがとうございます』と、それに極まってしまう」と。これだったら、誰とでも握手ができます。「お釈迦さんは素晴らしい」と言ってきたら、「そうですね。素晴らしいですね。あなたもお釈迦さんのように輝いてください。そして、多くの人を助けてあげてください。私はキリストの輝きで多くの人を助けます。人それぞれ向き不向きがありますから、お釈迦さんに向く人はお釈迦さんの道で生命賭けでやってください。私はキリストに惚れ込んだから、キリストに生命賭けでやります。きつと、天上ではお釈迦さんとキリストさまが手を握りあつて、抱き合つて、『ま

あ、地上のやつは手がやるね』なんてやつておられるでしょう」

と。そういう鴻大の氣宇をもちましようよ。今はありがたいことに、インターネットとか、ホームページとか何かで、その気になれば世界に発信できる、そういう時代でしょ。それを使って世界に発信する。外国語のできる人は英語に翻訳するとか、ドイツ語で『無の神学』のエッセンスを紹介するとか、そういう形で私たちはいろんな、せっかく科学が開発してくれたメディアのプラスの面を使つて、世界に語りかけていく。ありがたいことに、このビデオを撮つてくださっていたので、今だつてこうしてあの生き生きとした先生に接することができたわけです。これは決して、何か見えないものを見る形で偶像にしているのではない。そういうものを通して、本ものの世界に連なつていくという、それなんです。本ものの世界に、見えるものを通して見えない本ものの奥の世界に迫ろうということですから。どうぞ、誤解のないように。我々は見えるものも乗り越えて、見えざる本ものに繋がっていく。その世界に自身が入られて、そして、「一緒に行きましよう」という、そういう共存共栄の世界です。

●祈りは「主さま！」

今、癒し系だとか、共生の時代だとか、環境問題とか、いろんなことが言われている。全部これは福音が与えてくれるものです。キリストこそが癒し系であり、共に生かしてくださるものであり、決して審いたり排除したり抹殺したりするお方ではない。サタンは殺す霊です。神の霊、キリストの霊は活かす霊、生命の霊です。赦しがたいものを赦してしまう霊です。私たちの苦しみや悩みを全部、キリストは引きとつて、「わかっているよ、わかっているよ」と言われる。私は、苦しみや訴えを100%に受けとつてくださる方はキリストさまの他にないと思います。人間ではとても受けとりきれない。教会では牧師さんや神父さんがいろんな訴えを聞いて執成しをなさる。それはそれで大事でしょうけれども。本当の意味でそれを「100%わかった」という、「わかった」と言つた瞬間にもう解決されている。そういう方なんです、キリストというお方は。百卒長に対してそうでした。「よしつ」と言われた時に向こうで治っていた。ヤイロの娘もそうでした。柩で担がれてきたナインの一人息子もそうでした。「若者よ、起きよ！」と言つたら、起き上がってきた。そういうキリストさまだけが背負いきれる。

どんな問題でも、まず主さまのところへぶつけて、「主さま！」と言つて祈る。ある人は、十字架の形になつて祈る。また、丸くなつて祈る。人それぞれいい。私だつて丸くなる方です。人それぞれです。けれども、向かうところはキリストさまで。そして、主さまは、

「既に、お前の傷も、お前の痛みも、お前がボロくそに言われ、烈しい迫害にあつて
いる、それも私が全部十字架で背負つたよ。私も同じ目にあつてきたよ」

と。それを体験から言つてくださるのはキリストです。他の者たちは同情はできません。共に痛みを分かちあいたいというその気持ちはあります。一緒に祈ろうという、そこまではできる。でも、本当の意味で背負いきつて勝利を与え、道を開けるのはキリストさまだけです。だから、「主さま!」

と祈る。「主さま」のこの一言の祈りです。もうこれだけ。

いみじくも、今朝語りましたことと、先生がここで5分間で語られたことと、しかもその5分間の深み、凄さ、これを今この祈禱会において皆さんにふれていただいて、本当に私はありがたいと思っています。

●祈り

では、お祈りいたします。

主さま。ありがとうございます。本当に言葉にならない本ものの世界を、今日また小池先生の短いビデオのご講筵をおして、私たちに開示してくださいました。ありがとうございます。本当に先生をおして、掛け替えのないものをいただいたお一人ひとりがこうして今日、あらこちらから馳せ参じ、またこうして祈禱会まで残り、共に聖名を讃え——決して先生個人を讃えるではありません——先生を遣わしてくださいました主さま、あなたを讃えております。先生をしてどのように引きずり回し、苦しみ、嘆かしめ、祈らしめ、そして、

「大変な人だ、キリストは」

と告白せしめてくださったあなたさまを私たちは讃えております。

主さま、

「私を見た者は父を見たんだ」

と仰った主イエスさま。小池先生は、

『「主さま」と祈るんだよ。主さまの背後にお父さまがいらつしやる。我々は直接に『父よ』と祈れない存在だ。『主さま、主よ』というのが『父よ』の前にある」

と繰り返し仰っていました。「神よ」とはお祈りになさいませんでした。「主さま」と親しく、「主さま」という呼びかけと共にご自分をキリストのみ懷に投げ入れ、預け入れ、そして抱かれておられました。私たちも、言葉はいりません。全存在で「主さま!」と祈ります。本当に一言のこの叫びで、あなたは抱きとり、

「お前を既に贖つてあるよ。お前を既に抱いてあるよ。お前の中に天国が来ているよ。

私だ。大丈夫だ」

と。本当にあなたの聖言は、

「大丈夫だ。大丈夫だよ。我なり、懼るな。心安かれ」

と、これをもつて一言のもとに波風を鎮め、本当の平安の世界に、光の世界に入れてくださる主イエス・キリストさま。ありがとうございます。聖名にあつて、この感謝を御前にお献げいたします。アーメン。

(『エン・クリスト』57号、2004年8月発行より掲載)